



Title	接続詞「すると」「そうすると」「とすると」「と」 をめぐって
Author(s)	藤田, 保幸
Citation	詞林. 1993, 13, p. 63-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67333
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

接続詞「すると」「そうすると」「と」と「と」をめぐって

藤田 保幸

1 接続詞「すると」は、辞書の記述においては、しばしば

「そうすると」と言い換えることで意味説明される。また、

『月刊文法』（明治書院）の昭和四十五年十月号では、「接続

詞小辞典」として主要な接続詞の意味・用法等が説明されてい

るが、ここでは、「『すると』は『そうすると』の略。『そう

が落ちた』すると」と『する』が落ちた『と』の三語は同系統

（長田久男・執筆）と述べられている。こうした説明からする

と、「すると」は「そうすると」の、「と」は「すると」の省

略形と処理され、類義的なものととらえられているといえる。

なるほど類義的であることはもちろんだろう。しかし、相互に

相違はないのだろうか。

①・a 古代日本語には母音調和の痕跡らしいものがみとめ

られる。すると、日本語は北方のアルタイ系言語に属する

ものののだろうか。

①・b *古代日本語には母音調和の痕跡らしいものがみとめ

られる。と、日本語は北方のアルタイ系言語に属するもの

なのだろうか。

②・a こんなことを人前で言われたのは私だけだ。すると、

何か理由があるはずだ。

②・b ? こんなことを人前で言われたのは私だけだ。そうす

ると、何か理由があるはずだ。

②・cf こんなことを人前で言われたのは私だけだ。とす

と、何か理由があるはずだ。

①の例で、「すると」は「と」に置き換えられない。また、

②の例では、いささか微妙だが、「すると」を「そうすると」

に置き換えると不自然である。少なくとも、cfのように「とす

ると」と置き換える場合と比べると格段に適格性がおちると思

われる。

このように、それぞれの接続詞の用法には、共通性とともにズレが存在する。しかし、従来の研究では、このあたりについてさほど検討されたことはなかったように思われる。そこで、この稿では、「すると」「そうすると」「と」「と」にもう一つ類義

の「とすると」を加えて、四つの接続詞の用法の異同を考察していくことにする（注1）。

もっとも、考察が連文レベルにわたることもあり、細かには判定が微妙になるような問題も出てくる。そこで、この稿では、もっぱら大きな見通しをつけることに重点をおいて論ずるという方針をとってきたい。

2 ところで、ここでとりあげる四つの接続詞は、①②の例のように、話し手・書き手が自らの述べたこと・提示したことを承けて（主に書きことばで）一人で叙述を展開する際に用いられるが、また、語によっては、次例のように、他者との対話において、相手の述べたことを承けて用いられることもある。

③ 「ええ。たしか旦那は三十、でしたね。」

「はあ、私はあの、……四つ下です。」

「すると二十六、いやこれはひどい。まだそんなですか。」

（太宰治「ヴィヨンの妻」）

右のような、話し手が相手のことばを承けて接続詞を用いる場合と、話し手・書き手が自分の提示したことを承けて接続詞を用いる場合とは、接続詞の働きに相違が生じる可能性がある。そこで、一応この二つの場合を区別して考察したい。まず、3～5節では、自分の提示した内容を承けて一人で叙述を展開する場合の用法、6節では、相手のことばを承ける場合を扱う。なお、接続詞は、厳密には二文をつなぐものとは限らない。

先行の二文以上の内容を承けたり、後続の一文の一部分のみを導くというようなこともふつうに見られる。しかし、以下では、考察の便宜上、接続詞が先行の一文（前文）と、以下に導く一文（後文）を関係づけるような場合を中心に検討を進めていく。それで、大きな見通しをつけることはできると考えるからである。

3-1 さて、「すると」「そうすると」「とすると」「と」の用法を比較するにあたって、まず第一に、それぞれの接続詞の導く後文の文末形式に対するそれぞれの制約の相違に注目したい。

接続詞の用法の相違は、前文（先行内容）と後文（後続内容）をいかにつなぐかの相違である。言い換えれば、つながれる前文と後文の関係の相違、どういう内容・性格の文とどういう内容・性格の文が結びつけられるかの相違ということにもなる。ここでは、接続詞の導く後文のモダリティ的性格という点を手掛りとして、接続詞の用法を考えてみたい。

そもそも接続詞は、単に二文をそのままつなぐだけでなく、それが導く後文の文末に制約をかける場合があると思われる。例えば、同じ逆接の接続詞とされる「しかし」と「ところが」を例にすると、次のようなことが観察される（注2）。

④・a 遅刻はしてもいい。しかし、宿題はやってこい。

④・b *遅刻はしてもいい。ところが、宿題はやってこい。

「しかし」の場合は、後文末に命令形式をとることが可能だが、「ところが」の場合は不可である。つまり、「ところが」の場合は、それが導く後文の文末に命令形を許容しないといった形で、後文末に制約をかけている。このように、接続詞の場合にも、それが導く文末の言い方、つまりモダリティに、いわばある種の副詞のように制約をかけることがあるのである。

そこで、ここでとりあげる四つの接続詞もそれが導く後文の文末モダリティに制約をかけることがあるのかどうか、もしかけているのなら、どのように制約をかけているのか、次に比較・検討したい。

3-2 主に文末形式に注目し、表現のタイプをも考えて、後文でどういうモダリティ的文末表現形式がとれるかを考えてみた。一括して表1に示す。

表1を一見して明らかのように、「と」は他の三つと比べて、文末に対する制約が著しく強い。つまり、用法が狭いということになる。「すると」「そうすると」「とすると」も、命令等働きかけのモダリティや意志にかかわるモダリティは許容しない(注3)が、疑問や概言等判断にかかわるモダリティなら許容する。しかし、「と」は、概言や疑問のモダリティさえ許容しない。その点で、「と」は他の三つと比べて極めて性格の異なるものといえよう。のみならず、表では「と」が確言(「スル」形・「シタ」形言い切り)文末なら許容するとなつて

【表1 四つの接続詞が導く後文のモダリティ制約】

	確言 ～カ ～シ	概言1 ダカ	概言2 カレカ	概言3 カレカ カレカ	説明 バカ カガ	命令 禁止 ～カ ～カ	勧誘 ～カカ ～カ	意志 ～カ ～カ	希望 ～カ ～カ	疑問 ～カ
すると	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○
そうすると	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○
とすると	○	○	○	○	○	×	×	×	×	○
と	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×

いるが、詳しく見ていくと、更に細かな制限があるようである。以下、そのあたりにいささか立ち入ってみたい。

3-3 考察の次の手掛りとして、今度は「すると」の用法に着目しよう。「すると」は、最も一般的で、他の三語との置き換えもかなり自由にできる。そこで、この最も広く用いられるとみられる「すると」の用法を整理し、「と」や「そうすると」「とすると」との用法の重なり方をみてみたい。そうした検討は、当然右の文末制約の観察ともかかわってくるものと期待される。

例えば、『大辞林』（三省堂）によると、「すると」は次のように意味説明されている。

- (1) 前の事柄につづいて次の事柄がおこることを示す。
(2) 前の事柄の当然の結果として次の事柄が導かれることを示す。

さしあたりは、こうした記述・分類を利用することとしよう。このうち(1)の用法とは、次のような例に典型的に見られるものと思われる。

- ⑤ 私は将校のほうへ走り寄って、そうして文庫本を差し出し、お礼を言おうと思ったが、言葉が出ず、黙って将校の顔を見上げ、二人の眼が合った時、私の眼からぼろぼろ涙

が出た。すると、その将校の眼にも、きらりと涙が光った。

(太宰治「斜陽」)

- ⑥ それはフルートの音であった。お種は空耳だろうと思いつながらも、場合が場合だけに、やはり膝頭がふるえた。すると、また聞こえた。

(横溝正史「悪魔が来たりて笛を吹く」)

- ⑤では、「私の眼から涙がぼろぼろ出た」ことに続いて、「その将校の眼にもきらりと涙が光った」ということが起こり、⑥では、「お種は……膝頭がふるえた」ということに続いて、「(フルートが)また聞こえた」ということが起こる、という関係が「すると」で示されている。

一方、(2)の用法とは、次のような用例にみられるものであらう。

- ⑦ 横波は水や空気のような流体を伝えることができない。岩石のような固体の内部を伝わるのである。ところが光は横波だというのだ。するとエーテル(藤田註・光を伝えると考えられた架空の物質)は固体でなくてはならない。

(松田卓也「時間の本質をさぐる」)

- ⑧ ……つまり、翅が上へうっているときは翅の裏だけが見え、下方で合わさったときは、翅の表面だけが見えるわけである。すると、飛んでいるヒョウモンチョウは、あるときはオレンジ色に、次の瞬間は黒に見えるはずである。

(日高敏隆「昆虫という世界」)

⑨ マグマが地表で急冷する。すると、火山岩ができる。

⑦は、「横波は固体を伝わる。光は横波だ」という事柄から、「エーテルは固体である」という事柄が当然の結果として導かれ、⑧は前文の翅の動きに関する事柄から、必然的に「飛んでいるヒョウモンチョウは、あるときはオレンジ色に、次の瞬間は黒に見える」という事柄が導かれるということである。また、⑨は、「マグマが地表で急冷する」という事柄の当然の結果として、「火山岩ができる」という事柄が導かれるということである。(また、先の①・aも、古代日本語における母音調和の存在という事柄から「日本語はアルタイ系？」との事柄が一つの疑問として導かれ、この類である。)

以上の例から見ると、先の(1)の場合の「すると」の用法と、(2)の場合の「すると」の用法では、つながれる前文と後文の性格が、かなり異なっているということがわかる。(1)の例(⑤⑥)の場合、前文と後文は、ともに話し手の目に映った事柄が主観的な色合いを交えず淡々と描かれているといった性格のものである。従って、文末には言い切りの「〜スル(シタ)」形式が出てくるだけで、概言(推量)等の形式は出てこない(注4)。それに対し(2)では前文に述べられたことを承けて、後文には話し手のさまざまな判断・知識や疑問の主体的表明がなされる。ゆえに、後文末には、「〜デナクテハナラナイ」(⑦)、「〜ハズダ」(⑧)といった形式をはじめ、さまざまな判断・疑問の文末モダリティが出てくる。表1で、後

文末に判断や疑問のモダリティが許容されるとあったのは、この(2)の用法においてなのである。なお、⑨の場合は、後文の文末は単なる言い切りの形だが、この場合は主体が「そうなる」と断定する気持ちをはっきり感じられる。同じ言い切りの文末でも、そうした断定・主張の色合いの乏しい(1)の用例の文末とは違うものといえよう。

これを「すると」の用法として整理しなおすと、次のようになる。

(1) 前文の事柄描写をうけて、後文も話し手の目にうつるままの事柄を判断の色合いを加えず描写する展開。

(2) 前文の叙述をうけて、後文に話し手の判断や知識や疑問が主体的に表明される展開。

3-4 以上、「すると」の用法を整理してみた。これを手掛りに今度は「と」の用法について考えてみよう。表1でみたように、「と」は文末の概言(推量)等の判断にかかわるモダリティ形式はとれなかった。とすれば、「と」には(2)の用法はあり得ない。そして、確言文末のみをとれるということは、「と」が「すると」の(1)の用法にあたる用法をもっており、そうした用法でのモダリティ性の乏しい「〜スル(シタ)」形言い切り文末のみが許容されるということではないかと予想さ

れるが、どうだろうか。「と」の用例をみてみよう。

⑩・a 「おい、山県君！」と下から声を懸ける。と……笛の音がばったり止む。(田山花袋「重右衛門の最後」)

⑪・a なん台、馬車がとまって、おばあさんは乗らなかつた。と、向こうから立派なおともらいがきた。

(山本有三「路傍の石」)

⑫・a もう一度パンを投げると、こんどはすうっと近づいてきた白鳥が、さっとさううようにくわえた。と、他の一羽がその白鳥の餌を奪おうとして追いかけた。

(三浦綾子「続氷点」)

⑩・⑫は典型的な「と」の用例と考えられるが、いずれも、前文・後文ともに、話し手に目につるままの事柄を述べたものであり、後文末も主體的な判断等の色合いのあまりない言い切りの「スル(シタ)」形式をとっている。従って、これらの「と」は、「すると」の(1)にあたる用法をもっていると考えられる。実際、これらの「と」は、(1)の用法の「すると」に自然に書きかえられる。

⑩・b 「おい、山県君！」と下から声を懸ける。すると……笛の音がばったり止む。

⑪・b なん台、馬車がとまって、おばあさんは乗らなかつた。すると、向こうから立派なおともらいがきた。

⑫・b もう一度パンを投げると、こんどはすうっと近づいてきた白鳥が、さっとさううようにくわえた。すると、他

の一羽がその白鳥の餌を奪おうとして追いかけた。

また、3-3でみた(1)の用法の「すると」の用例については、逆に「すると」を「と」に自然に書きかえることができる。

⑤・b ……、二人の眼が合った時、私の眼からぼろぼろ涙が出た。と、その将校の眼にも、きらりと涙が光った。

⑥・b それはフルートの音であった。お種は空耳だろうと思いつながら、場合が場合だけに、やはり膝頭がふるえた。と、また聞こえた。

これに対し、後文が「スル」文末をとっていても、(2)の用法の「すると」の例では、「すると」は「と」に書き換えられない。

⑨・b マグマが地表で急冷する。と、火山岩ができる。

以上から明らかなように、「すると」と「と」が類義だと言っても、この二つは(1)の用法でのみ重なっているのである(注5)。

3-5 続いて、表1をみると、「とすると」「そうすると」「すると」の三つは、文末制約のあり方が同じである。では、この三つは、用法に相違はみられないのだろうか。ここでも先の「すると」の用法整理を利用して考えてみよう。まず、「とすると」の例から検討する。

⑬ まず、少し乱暴な実験のようであるが、ゴキブリの頭を

切り落とす。それでもゴキブリは結構動きまわる。またそんな状態でも何日も生きているので、身体の動きを計ることもできる。頭がなくなるとゴキブリのサーカディアンリズム（藤田註・約一日周期の体内リズム）も消滅する。すると、サーカディアンリズムの時計は頭部にあることになる。

⑭ 表の部屋の窓からは、誰だっけ通りにいる群衆たちの眼にとまらなくて逃げることはできるはずがない。とすると、犯人は裏の部屋の窓から出たにちがいないのだ。

（E・A・ポー（佐々木直次郎・訳）「モルグ街の殺人」）
「とすると」の用例は、いずれも右のように、前文の事柄を承けて後文に話し手の判断等の表明を導く（2）のタイプの展開となっており、右の⑬⑭の「とすると」も、（2）の用法の「すると」に自然に置き換えられる。逆に（1）の用法の「すると」を「とすると」に置き換えると不自然になる。

⑯ c 米それはフルートの音であった。お種は空耳だろうと思いつくまでも、場合が場合だけに、やはり膝頭がふるえた。とするとまた聞こえた。

従って、「とすると」は、「すると」の（2）の用法にあたる用法をもち、「すると」と（2）の用法においてのみ重なっているといえる。

一方、「そうすると」はどうであろうか。例をみてみよう。
⑮ 「しかし、あれは雷神でしょう。そうすると風神と対に

なっていないければならぬはずのものが、……」

（横溝「悪魔が来たりて笛を吹く」）
⑯ 問題は四月五日、または四月六日に懷古園に宇月がいたと主張する時間（午後一時二二分から四時八分までの間）

以前にこの名刺入れが拾われる確率はどれくらいかである。この確率はかなりあるように思える。そうすると、宇月はその名刺入れが拾われた以前に懷古園にいたことがわかってしまう。
（群上道雄「推理小説を科学する」）

⑰ しかし、よく水面をしらべても、これだけ多数のミズスマシを集めるであろうような餌など浮いていない。……この集団は、特売場的集団（藤田註・何かをほしがって集まった集団）でもないことになる。そうすると、彼らはやはり互いにひきつけあって集まってきたことになる。

（日高「昆虫という世界」）
「そうすると」の場合も、「すると」の（2）の用法にあたる用法の例が多い。しかし、（1）の用法でも用いることができる。

⑱ 夜になった。そうすると、やつがやって来た。

ただし、「すると」「と」に比べ、「そうすると」は、「そう」と先行内容を指示・強調する語感があり、いささか冗長な印象がある。そして、先行内容を指示・強調する語感から、前文に何らかの出来事・行為があつて、後文の機縁のようにとれる等の関係づけとなる⑱のような場合は自然だが、前文が具体

的な出来事等でなく、偶然的な結びつき方で後文の事柄が続くような場合、「すると」に比べ「そうすると」は、余剰的で不自然になるようである。

⑬・a あたりは物音一つ聞こえなかった。すると、そこに見知らぬ若い娘がどこからともなく現われた。

⑭・b あたりは物音一つ聞こえなかった。そうすると、ここに見知らぬ若い娘がどこからともなく現われた。

以上見た通り、「すると」「そうすると」「とすると」は、(2)の用法をもつという点で共通性がある。しかし、「すると」が「と」共有している(1)の用法がない、あるいは、不自然な場合があるという点で、「すると」「とすると」「そうすると」は完全に一致するわけではない。

3-6 四つの接続詞についてのこの章での以上の考察結果を表にまとめておこう。

以上見たところでは、「すると」「そうすると」「とすると」は、(2)の用法をもつ点で同じということになった。しかし、今少し厳密にみて、この三つには、この用法をもつという点においても相違するところはないのだろうか。節を改めて、次にそのあたりを究明していくことにする。

表2 「と」「すると」「そうすると」「とすると」の用法整理

(1) 前文の事柄描写をうけて後文も話し手の目にうつるままに事柄を描写する展開

と

すると

(2) 前文の叙述をうけて、後文に話し手の判断・知識・疑問が主体的に表明される展開

そうすると

とすると

4-1 前章で「すると」「とすると」「そうすると」は、前文をうけて後文に話し手の判断等の表明が出てくる展開において用いられるという点で共通するということを述べた。それでは、この三つの接続詞には、どのような違いがあるのだろうか。三つの接続詞がそれぞれどのような関係構成(論脈展開)をするのかということ、今少し掘り下げることで、その点を究明したい。考察の方法として、これらの接続詞によって結ばれる連文を複文に書き換えるという操作を手掛りとすることにしよう(注6)。

4-2 接続詞には、そのままの形で、あるいは、それに類する形で接続助詞として用いられるものが少なくない。例えば、

「けれども」と「だから」を例に示してみよう。

㉑・a 風邪をひいた。けれども学校へ行った。

㉒・b 風邪をひいたけれども、学校へ行った。

㉓・a 今日は疲れた。だから早く寝よう。

㉔・b 今日は疲れたから、早く寝よう。

㉕の「けれども」はそのままの形で、㉖の「だから」はそれに類する「から」の形を接続助詞として用いることができ、前文と後文を結んで一つの複文に書き換えることができる。書き換えたbが、もとのaとほぼ同義であることから分かるように、接続詞の形成する意味関係、言い換えると、その論脈展開のあり方は、それと等価的な接続助詞を用いて複文表現にした場合でも維持される。

ところで、ここに面白い事実がある。先の(2)の用法の「すると」(以下、特に断らない限り(2)の用法の場合を扱う)による二文の接続の場合、それを複文に書き換えると、場合により、二種類の接続助詞が出てくるのである。

㉗・a やがて三時になる。すると、サイレンが鳴るぞ。

㉘・b やがて三時になると、サイレンが鳴るぞ。

㉙・a 三時になるとサイレンが鳴ることになっている。すると、もうすぐサイレンが鳴るぞ。

㉚・b 三時になるとサイレンが鳴ることになっているとす

ると、もうすぐサイレンが鳴るぞ。

㉗の「すると」は複文になると接続助詞「と」に、㉙では「とすると」に書き換えられる(「とすると」も複合接続助辞と考える)。

㉘・bの「と」の部分「とすると」にしたり、㉙・bの「とすると」を「と」にしたりすると不自然になるから、「と」と「とすると」は同義ではないといえる。そして、書き換えによって、「すると」が、ある時は「と」に、ある時は「とすると」になるのであるから、「すると」による二文の関係づけは、二種類ある。言い換えれば、(2)の用法の「すると」による論脈展開のあり方は二タイプあるということになる(注7)。

今少し立ち入っておくなら、接続助詞「と」と「とすると」の違いは、㉗・bと㉙・bを比較すると明らかである。

㉗・bの「と」は、単に前件の「やがて三時になる」という事柄をうけているだけである。「サイレンが鳴る」という判断を下すにあたって「やがて三時になる」という事柄を「サイレンが鳴る」ことの、いわば前提・条件としてそのままうけとめているだけである。それに対し、㉙・bの「とすると」は、いささか異なるだろう。「三時になるとサイレンが鳴ることになっている」ということを単にうけとめたのではない。Aそれが確かだということならVという確認の気持ち、あるいは、Aそれを認めて考えるならVという承認の気持ち加わったうえでうけとめて、「サイレンが鳴る」という判断を下しているのである。

従って、これによれば、(2)の用法の「すると」による論脈展開のあり方は、やはり二つあるということになるろう。

今少し、実際の用例をあげておこう。

㉔・a うち抜くといつても針を押しつけければよい。針に使うステンレス鋼の管の縁は磨いて尖らせておく。すると組織の一部は針の空間の部分に丸く切れて嵌まり込むだろう。

(川村「脳のなかの時計」)

㉔・b ……磨いて尖らせておくと、組織の一部は針の空間の部分に丸く切れて嵌まり込むだろう。

㉔・a 自分を殺すほどのことをしなくても、過去へ戻ったこと自体が多少なりとも変な影響を世界に対しておよぼす。すると原因と結果の関係、つまり原因が結果に先立たねばならないとする因果律を破ることになる。

(松田「時間の本質をさぐる」)

㉔・b ……世界に対しておよぼすと、原因と結果の関係…
…因果律を破ることになる。

まず㉔㉔の例は、「すると」が接続助詞「と」で書き換えられる例である。このような場合、「すると」は、先行の事柄をそのままうけて、その結果として後文の判断等を導くという論脈展開を形づくっている。

これに対し、以下の三例は、「すると」が接続助詞「とすると」で書き換えられる例である。

㉔・a ところが、物理の基本法則は、過去と未来の区別を

しない。すると熱力学第二法則というのはなんなのか。

(松田「時間の本質をさぐる」)

㉔・b ……過去と未来の区別をしないとすると、熱力学第二法則というのはなんなのか。

㉔・a つまり、この品物は、フォーセットか犯人か、そのどちらかにとって、わざわざ机のうえにとりだしておくだけの重要な意味をもっていたのだと言えるわけです。するとなかなか重要な意味をもっているとお考えになりませんか？

(E・クイーン(横尾定理・訳)「Zの悲劇」)

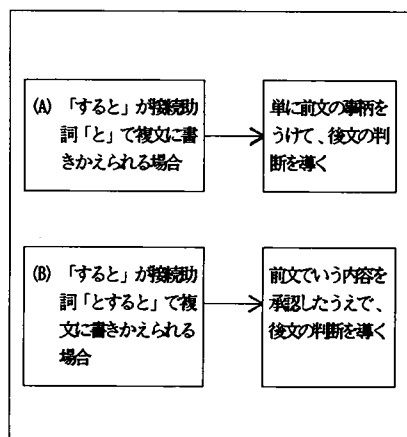
㉔・b ……わざわざ机のうえにとりだしておくだけの重要な意味をもっていたとすると、なかなか重要な意味をもっているとお考えになりませんか。

㉔・a その話を聞いたとたん、彼は逃げだした。すると、犯人は彼なのだ。

㉔・b ……逃げだしたとすると、犯人は彼なのだ。

以上の三つの例は、接続助詞「と」で書き換えられる例とちがい、㉔は一般的な知識となっている事柄、㉔は話し手の判断内容、㉔は具体的な事実、と様々な事柄をいったん承認したうえで、その帰結として話し手の判断等が導かれるという論脈展開を、「すると」が担っているといえる。

以上を整理すると、次のようになる。



4-3 ところで、「とすると」「そうすると」についても、右の「すると」の場合のような用法の区別が考えられるのだろうか。それぞれについて、複文への書き換えによって調べてみよう。

まず、「とすると」については、はっきり「とすると」という形の接続詞であることから予想できるように、複文への書き換えでも、「とすると」がそのまま接続助詞として用いられ、「と」で書き換えられる例は見あたらない。いくつか例をあげておこう。

㊤・a ……、熱は熱い方から冷たい方に移動することはよ

く知られている。このとき、物体の落下やころがりと違って、位置エネルギーが減るわけではない。とすると、熱の移動を支配している法則はなんだろうか。

(都筑卓司「時間の不思議」)

㊤・b ……位置エネルギーが減るわけではないとすると、熱の移動を支配している法則はなんだろうか。

㊤・a 表の部屋の窓からは、誰だって通りにいる群衆たちの眼にとまらないうで逃げることもできるはずがない。とすると、犯人は裏の部屋の窓から出たにちがいないのだ。

(ポー「佐々木・訳」「モルグ街の殺人」)

㊤・b ……群衆たちの眼にとまらないうで逃げることもできるはずがないとすると、犯人は裏の部屋の窓から出たにちがいないのだ。

㊤・a それなのに窓枠はしまっていた。とすると、窓にはひとりでにしまる力がなければならんことになる。(同右)

㊤・b ……しまっていたとすると、窓にはひとりでにしまる力がなければならんことになる。

以上の三つの例は、「とすると」が、㊤では一般的な知識、㊤では話し手の判断内容、㊤では具体的な事柄をうけていったん承認したとして、後文の判断等を導くものといえる。

以上、接続詞「とすると」の論脈展開は、前文に示されるさまざまな内容をいったん承認したうえで、その帰結として話し手の判断等を後文に導くというものである。「とすると」には、

接続助詞「と」で複文に書き換えられるような、単に前文の具体的な事柄内容を受けるという用法はない。それ故、例えばそうした「と」にしか書き換えられない「すると」を「とすると」に置き換えると不自然である。

㉔・a 私がここにいることにする。すると、あなたも安心だろう。

㉔・b 私がここにいることにすると、あなたも安心だろう。
㉔・c *私がここにいることにする。とすると、あなたも安心だろう。

一方、「そうすると」には、両方の用法（論脈展開のあり方がみとめられるようである。まず、「そうすると」が具体的な事柄を単に承ける例である。接続助詞「と」で複文に書き換えられる。

㉔・a 来月一日付で新人が二人配属される。そうすると、随分案になるはずだ。

㉔・b 来月一日付で新人が二人配属されると、随分案になるはずだ。

㉔・a 要するにほうっておけば宇宙は、最終的には熱平衡系になるということだ。そうすると、宇宙に何も動きがなくなってしまう。（池内「宇宙からみた自然」）

㉔・b ……熱平衡系になると、宇宙に何も動きがなくなってしまう。

一方、次例は、「そうすると」が、前文に示されるさまざま

な内容をいったん承認したうえで後文の帰結を導くという用法のものである。こちらは、接続助詞「とすると」で複文に書き換えられる。

㉔・a 彼が犯人だという証拠は何もない。そうすると、冤罪だった可能性が高い。

㉔・b ……証拠はないとすると、冤罪だった可能性が高い。

㉔・a しかし、最近、……宇宙の大きさは無限大らしいといわれた。そうすると、インフレーション説には、まことに具合の悪いことになる。

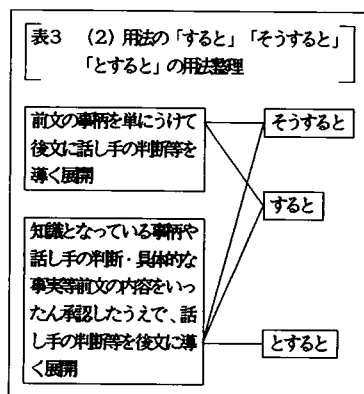
（池内「宇宙からみた自然」）

㉔・b ……宇宙の大きさは無限大らしいとすると、インフレーション説にはまことに具合の悪いことになる。

以上、「そうすると」も「すると」と同様二つのタイプの論脈展開の働きがあることがわかる。

4-4 前節で述べた(2)の用法、すなわち、「前文の叙述をうけて、後文に話し手の判断等が主体的に示される展開」をする接続詞「すると」「とすると」「そうすると」について、この4節ではその(2)の用法としての三つの異同を、複文への書き換え操作を手掛かりにさらに詳しく掘り下げた。その結果、(2)の用法としても、「単に前文の事柄をうけて、後文の判断等を導く展開」と「前文で示される内容をいったん承認したうえで後文の判断等を導く展開」の二つの論脈展開のあり

方（用法）があることが明らかになった。そして、「とすると」は後者の用法のみをもち、「すると」「そうすると」は二つの用法をあわせもつことがわかった。この結果を表にまとめておく。



5-1 前節までで、(2) 用法の「すると」「そうすると」「とすると」は、さらに詳しくみると、前文の内容をいったん承認したうえで後文にその帰結としての話し手の判断等を導く用法があり、「すると」と「そうすると」は、右に加えて、前文の事柄を単に承けて後文の話し手の判断等を導く用法があることがわかった。

前文の内容を承認しての用法（以下、特に断らない限り、こ

の節では、この用法に限って考える）の場合には、三語が重なることになるが、この場合三語は全く一致して相違がないのだろうか。この節では、そのあたりをもう一步追求したい。考察の方法として、モデル的な二文の接続をさまざま考えて、三つの異同を探る。まずは、形の上でもはっきり対立し、用法にも相違のある「とすると」と「そうすると」で比較を行い、その後で用法も広く一般的とみられる「すると」に言及する。

5-2 「そうすると」と「とすると」の用例をみていくと、後文の文末には「ハズダ」「ダロウ」「コトニナル」など判断にかかわるモダリティ形式が出てくることが多い。そこで、考察の便宜上、以下後文末を「ハズダ」でそろえてモデル的に考えたい。すなわち、「とすると」「そうすると」によって結ばれる二文の典型的な接続パターンとして、

前文A. —「とすると」 + 後文B「ハズダ」。
 「そうすると」

というパターンで例を考え、特に、前文Aによって「とすると」「そうすると」の使用にどのような制約がおこるのかを調べてみることにする。

⑦・a 一時間は六十分だ。とすると、一日は千四百四十分のはずだ。

⑦・b 一時間は六十分だ。そうすると、一日は千四百四十分のはずだ。

⑧・a 冬のスポーツといえば、やはりスキーだ。とすると、スキー場は、今頃混雑しているはずだ。

⑨・b? 冬のスポーツといえば、やはりスキーだ。そうすると、スキー場は、今頃混雑しているはずだ。

⑩の場合、「とすると」「そうすると」ともに、その使用に不自然さはないが、⑪の場合、「そうすると」を用いると、かなり不自然になる。さらに例をあげよう。

⑫・a 日本は水が豊富だ。とすると、水による災害も多いはずだ。

⑬・b 日本は水が豊富だ。そうすると、水による災害も多いはずだ。

⑭・a FAXは便利だ。とすると、もっと普及するはずだ。

⑮・b? FAXは便利だ。そうすると、もっと普及するはずだ。

⑯⑰では、「とすると」「そうすると」ともに、その使用に不自然さはないが、⑱⑲では「そうすると」の使用が、不自然になる。この相違は、おそらく前文Aの内容によるものと思われる。簡単に言うと、⑲⑳では前文Aは、話し手が特に主体的に実感し主張している事柄ではなく、一般性の強い情報内容である。言い換えると、話し手にとって、必ずしも思い入れがない中立的な情報を示しているといえよう。それに対して、㉑

㉒の前文Aの内容は、話し手の主体的な実感・主張の色合いの強い情報、つまり思い入れの強い情報である。このような情報を話者にとって身近な情報、「近い情報」と呼ぼう。

こうしてみると、前文Aの内容が話し手にとって「近い情報」であるときは、それを「そうすると」で承けて後文を導くと不自然になるといえる。いわば、「そうすると」は、身近な物事を承けて以下に関係づけていくという接続をしないのである。

前文Aの文末が「ダ」の形の場合はかりでなく、前文Aの文末が形容詞・動詞述語のときでも同様のことは認められる。

㉓・a 水は油より重い。とすると、下に沈むはずだ。

㉔・b 水は油より重い。そうすると、下に沈むはずだ。

㉕・a 真吾は野球がとても上手い。とすると、将来プロになれるはずだ。

㉖・b? 真吾は野球がとても上手い。そうすると、将来プロになれるはずだ。

㉗・a 水と水銀を混ぜると水銀は沈殿する。とすると、水銀は水より重いはずだ。

㉘・b 水と水銀を混ぜると水銀は沈殿する。そうすると、水銀は水より重いはずだ。

㉙・a 一弘は本当によく練習している。とすると、次の大会は期待できるはずだ。

㉚・b? 一弘は本当によく練習している。そうすると、次の大会は期待できるはずだ。

④③は「水は油より重い」、④④は「水と水銀を混ぜると水銀は沈殿する」と、いずれも一般論的な内容が前文に出てくるのに対し、④⑤は「真吾は野球がとてもし上手い」、④⑥は「一弘は本当によく練習する」と、いずれも話し手の思い入れの強い「近い情報」が前文に出てきている。そして、前文が「近い情報」である④⑦④⑧の場合には、「そうすると」を用いると不自然になる。

5-3 以上、前文Aの文末が言い切り形で確定的な言い方の場合はばかりを見てきたが、不確定的な言い方のときはどうなるのだろうか。文末の概言的なモダリティ形式でも、「〜ニチガイナイ」や「〜ダロウ」は、一般的な事実の主張にも用いられるが、「〜カモシレナイ」は個人の内のみの主観的な考えを示すという色合いが強い。(つまり、一般性のある事実を主張する表現になりにくい。)これを前文の文末においた場合、前文は「近い情報」の内容となり、「そうすると」で承けにくくなるのではないだろうか。

④⑤・a ひよっとすると、彼が来たのかもしれない。とすると伝言があるはずだ。

④⑥・b ひよっとすると、彼が来たのかもしれない。そうすると伝言があるはずだ。

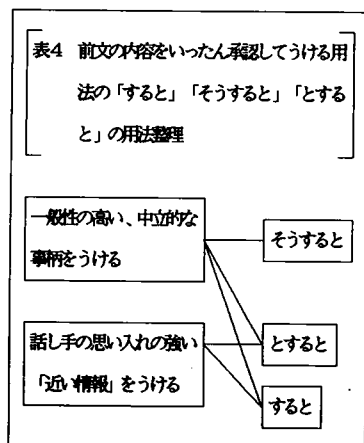
a に比べるとbの方は、かなり不安定と感じられる。こうしたことも、以上に見てきた「とすると」と「そうすると」の間の用法の違いの存在を支持するものといえる。

5-4 おしまいに「すると」についてみておこう。「すると」には、前文が「近い情報」かどうかにかかわって、右に見たような制約があるのだろうか。

④⑨・c 日本は水が豊富だ。すると、水による災害も多いはずだ。

④⑩・c FAXは便利だ。すると、もっと普及するはずだ。

④⑨の前文の内容は中立的情報であり、④⑩の方は「近い情報」である。いずれの場合にも、「すると」の使用に制約はない(注8)。つまり、「すると」は、前文が「近い情報」か否かという点については、「とすると」と同様にいずれでもその使用に支障がないのである。以上を表にまとめておく。



6-1 3-5節では、話し手・書き手が自らの述べたこと・提示したことを承けて一人で叙述を展開する場合をとり扱ってきたが、ここでは、対話の中で相手のことばを承けて用いられる「すると」「そうすると」「とすると」について考察してみよう(注9)。

対話の中で相手のことばを承けての用法ということになると、「すると」「そうすると」「とすると」は、当然相手からうけとめた情報の帰結として話し手の判断等の主体的表明を導く談話展開で用いられると考えられる。実際に用例をみても、そうした用法に限られており、対話の中で相手のことばを承けての「すると」「そうすると」「とすると」はこうした談話展開を支えるものとしてのみ用いられるといえる。

④⑥ 「……、天銀堂事件の盗品目録のなかに、ダイヤをちりばめた耳飾りというのがあるんです。しかも犯人はよほどあわてていたものと見えて、一对の耳飾りのうち片方だけを持っていったんです。」

「すると、残りの片方はいまでも天銀堂にあるんですね」
(横溝「悪魔が来たりて笛を吹く」)
④⑦ 「初め女が男の手の甲へ何か指の先で文字を書くとき度は男が女の手へ返辞らしきものを書き記す。二人は長い間頻りにそれを繰り返しているのだ。」

「ははあ、そうすると其奴らはもう一人の男に内証で密会の約束でもしていたとみえる」(谷崎潤一郎「白昼鬼話」)

④⑧ 「ということは……やっぱり相対性原理を応用しても明日の新聞をつくるということではできない相談なのですか」
「そうです。もしそんな予言めいた事が可能なら、一九〇五年に相対論が発表されたとたんに大騒ぎになったでしょう」

「とすると、あなたがたにはどうして明日がわかるのですか」
(都筑卓司「タイムマシンの話」)

対話の中で相手のことばを承けてのこれら接続詞の用法が、相手からのさまざまな情報を受けてそれから導かれる判断等の表明を以下に導くものとする、その用法をもたない「と」の場合、対話で相手のことばを承けては用いられないと予想される。この点を確認してみよう。

④⑨・a 「規子はもう教室にいませんよ」

「すると、もう帰ったのかな」

④⑨・b ＊「規子はもう教室にいませんよ」

「と、もう帰ったのかな」

bのように、対話では「と」と適当でない。3節で、「と」は、話し手の目にうつるままに、前文の事柄描写を承けて後文の事柄描写を述べる場合にのみ使われるとした。そうした「と」は、対話の中では、使われることはないといえる。

6-2 4節で、「とすると」は、前文の内容をいったん認めて、そこから後文に話し手の判断等の主体的表明を導く論脈展

開しかなさないとした。この点に関連して、次のような事実がある。

⑤・a 「別れよう。二人はおしまいだ」

「すると、今まで私が尽くしてきたことは何だったの」

⑤・b 「別れよう。二人はおしまいだ」

「そうすると、今まで私が尽くしてきたことは何だったの」

⑤・c 「別れよう。二人はおしまいだ」

「とすると、今まで私が尽くしてきたことは何だったの」

恋人同士で別れ話を持ち出された文脈だとして、右のような場合、「別れよう。二人はおしまいだ」という男の言葉を、女の方が「とすると」でうけるのは、かなり不自然である（よく情景をイメージされたい。「とすると」でうけると、あまりに平気で動揺の色も感じられず、不自然な印象がある。もっとも、よほどクールで物に動じない女性をイメージするなら別だが……）。それ以下で、女が非難していることからわかるように、女は男の言葉を認めようとしていない。そんな場合、いったん与えられた内容を認めたとすで、後の自らの発言を導く「とすると」は、使い難いのである。（前の内容を単に承ける用法ももっている「すると」「そうすると」なら使える。）右の観察は、この稿の4節の分析を支持するものといえるだろう。

6-3 5節では、「そうすると」は、話し手にとって身近に感じられる情報内容が前文にくる時、使うと不自然になるとし

た。では、対話の中でも、相手からの情報が話し手にとって「近い情報」であった時にも、「そうすると」の使用は制約をうけるのだろうか。こうした違いは、対話では極めて微妙になってほとんど出ないことが多いが、特殊な場面では、やはり認められるようである。

⑤・a 「王手!」 「すると、私の負けか」

⑤・b 「王手!」 「とすると、私の負けか」

⑤・c 「王手!」 「そうすると、私の負けか」

⑤ — 二人のガンマンが決闘して、お互い物陰から狙った

り、背後に回ろうとするなど、緊迫した応酬の結果

男A（後ろからピストルをつきつけて）

「手をあげろ」

男B 「※そうすると（／すると／とすると）オレの負けだな」

このように対決・勝負のような対立が際立つ場合、当事者として自分の立場や形勢を極めて強く左右するような事柄は、「近い情報」と感じられる。従って「そうすると」で承けるのは不自然である。（実際、⑤で「そうすると」だとよそごこのように状況にそぐわないし、⑤・cのように言えなくはないが、何か負けを悟って勝負からおりましたような虚ろな言い方になる。）こうした事実が観察されることは、この稿の5節の分析を支持するものともいえるだろう。

以上、対話で相手のことばを承けて用いられる「すると」

「そうすると」「とすると」にも、話し手が一人で叙述を展開する場合と一応同様の制約・規則性が働くことがわかる。

7 この稿で考察してきた結果を下表にまとめておきたい。

「すると」の用法は、他に比べて最も広い。

「と」は、話し手の目に映るままに主観を交えず描かれた事柄描写の表現を、次の事柄描写の表現につないでいくという論脈展開をするだけである。

「とすると」は、前文の内容をいったん承認してうけとめ、以下に話し手の判断等の主体的表明を導く論脈展開をする。前文の内容が、中立的な情報であっても、話し手の思い入れの強い「近い情報」であっても、承けることができる。

「そうすると」は、前文の事柄を単に受け、そこから話し手の判断等の主体的表明を以下に導く論脈展開と、前文の内容をいったん承認し、そこから主体的表明を以下に導く論脈展開をするが、後者の場合、前文の内容は中立的なものでなければならず、「近い情報」がくることはできない。

以上のように、四つの区別を示すことができる。

表5 「すると」「そうすると」「とすると」「と」の用法の異同

	「描写」→「描写」の展開	「事柄を単にうける」→「主体的表明」の展開	「内容をいったん承認」→「主体的表明」の展開	「近い情報」が前文にくることができる
すると	○	○	○	○
そうすると	△	○	○	×
とすると	×	×	○	○
と	○	×	×	×

「注」

(一九九三・二・三稿)

(1) 「そうすると」の場合、時として接続詞なのか先行内容を反復して述べる動詞述語句なのか区別しにくいことがあり、「そうすると」をはじめから接続詞として扱っていくことが、あるいは問題なのかもしれない。ただ、接続詞とは、先行叙述を承けて後の叙述を導く語句であるから、先行叙述を反復してうけとめつつ後の部分へとつないでいく反復表現とは、本来連続的なものである。そこで、この稿では、一つの具体的な動作・行為が行われることを新たに述べて明らかに実質的な動詞として用いられている次例などを別として、単なるつなぎの働きのみの形式的な語ととり得る「そうすると」は、すべて接続詞と扱いたい。

(ア) 彼はここのとてを叩いてみると言った。そうすると(叩くと)、いい音がした。

(2) この問題に関しては、北野(一九八九)参照。

(3) 表1のとおり「そうすると」は一般に命令等の文末を許容しないが、次のような場合なら可かもしれない。

(イ)・a そうすると、今度はおまえが会に行け。

しかし、次例のように、一般に命令文末は不自然である。

(イ)・b *そうすると、会に行け。

(イ)・c ?そうすると、おまえが会に行け。

a のような場合、一文の文脈に例え() 内のような飛躍があり、「そうすると」の文末制約から逸脱するのではないかと思われる。

(イ)・cf そうすると、(何トカシナイトイケナイ。ソレデハ、) 今度はおまえが会に行け。

(4) 話し手の目に映った事柄が主観的な色合いを交えず淡々と描かれるというのだから、こうした場合に出てくるのは、仁田義雄のいう「状況描写文」にあたるものかとも思われるが、必ずしもそれとは一致しないようである。なぜなら、「状況描写文」は否定形がとれないとされるが、こうした「すると」による文連続では否定文が出てくるからである。

(ウ) 彼は耳をすました。すると、何も聞こえない。

(5) 「すると」の(1)用法と、「と」の用法が全く重なるかどうか、厳密にはいささか問題が残る。そのあたりのことも含めて、「と」の用法については、なお別稿を用意したい。

(6) 複文への書き換えの際に、複文前件句におさまるよう論脈展開とはかかわらない前文の文末表現を削る必要があることがある。その点、ここで断っておきたい。

(7) ちなみに、(1)の用法の「すると」は、ほぼ接続助詞「と」によって複文に書き換えられるが、時に複文への書き換えができないものもある。

(エ)・a 俊介が外へ出た。すると、空に星が光っていた。

(エ)・b 俊介が外へ出ると、空に星が光っていた。

(オ)・a どうしてもその問題の解決がつかなかった。すると、「いいことがある。」と有里子が言った。

(オ)・b *どうしてもその問題の解決がつかないと、「い

いことがある。」と有里子が言った。

(8) ただし、「すると」より「とすると」の方が適格度が高いとする内省もあり、このあたり、あるいは微妙に揺れや個人差があるのかもしれない。

(9) なお、対話、一人での叙述展開を問わず認められる制約として、接続詞「とすると」は、常に文頭に立たねばならないという規則性がある。

(力)・a 周一が帰ってきたな。今度は、すると、陽一番だ。

(力)・b 周一が帰ってきたな。今度は、そうすると、陽一番だ。

(力)・c *周一が帰ってきたな。今度は、とすると、陽一番だ。

(キ)・a 「今、七時十分前だよ」

「僕は、するともう行かなくちゃならない」

(キ)・b 「今、七時十分前だよ」

「僕は、そうするともう行かなくちゃならない」

(キ)・c *「今、七時十分前だよ」

「僕は、とするともう行かなくちゃならない」

右のように、「すると」「そうすると」が、文中に置いてもある程度使えるのに対し、「とすると」を文中にもってくると、著しく不自然になる。これは、「とすると」の最初の「と」が直前のものをうけとめるような性格をもつためではないかと思

われる。それ故に、文頭でなければ十全に接続詞として働けないのだろう。

〔参考文献〕

北野浩章（一九八九）「『しかし』と『ところが』——日本語の逆接系接続詞に関する一考察」（『言語学研究』（京都大学）8）

〈付 記〉

この稿は、筆者の勤める愛知教育大学日本語教育コースの現四年生山崎綾子の卒業論文指導の中でアイディアを得てまとめたものである。その意味では、この稿は山崎との合作といつてよいかもしれない。貴重な用例のいくつか等、彼女に負うところは大きい。謝してここに明記しておきたい。

（ふじた・やすゆき 愛知教育大学助教授）